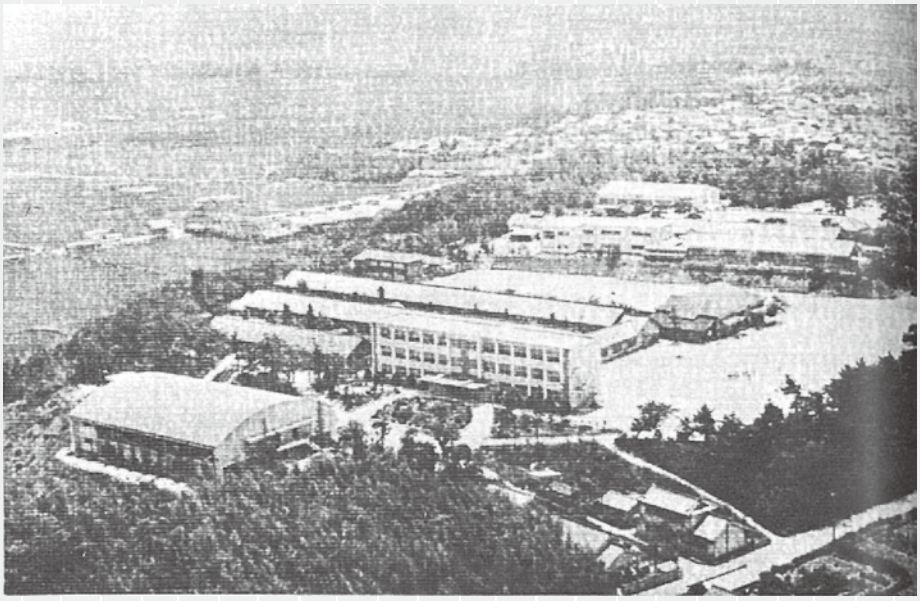
Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No. 104

七州城図　牧野敏太郎画



七州城跡にあった
豊田東高校旧校舎の全景

企画展の展示制作に
携わる豊田東高校の生徒

目次

企画展　山の上の緑の学校
―七州城から私たちの学び舎、そして博物館へ―　2

豊田市教育自主研究グループ（社会科）と
豊田市郷土資料館の連携展示
企画展「縄文人はグルメだった!?」を終えて　3

修復記念特別公開
「よみがえる織田信長像」後記　4

平成 30 年度　文化財保護事業報告　5

平成 30 年度　郷土資料館事業報告　6

先人の想いが眠る　枝下用水 旧取水口跡　7

祭り歳時記～とよたの猩々～　8

ISSN 0919 - 0120
20190710　No.104

企画展　山の上の緑の学校

―七州城から私たちの学び舎、そして博物館へ―

豊田東高校跡地の桜（2019年）

現在、計画を進めている新しい博物館は、県立豊田東高等学校跡地に建設を予定しています。ここは、かつて挙母藩を治めていた内藤家の居城・挙母（ころも）城（七州城）が築かれた地であり、現在まで連綿と歴史が息づいている場所です。

今回の企画展では、挙母城から若者たちの学び舎に、そして博物館へと続いていくこの地の歴史と、歴史を紡いだ人々の記憶を、多様な資料と共に振り返ります。また、博物館に寄せられる思いを、豊田東高校生徒による展示からお伝えします。

ころも焼茶碗
神成印　渡辺香堂絵付

あわせて、本展では「愛知やきものヒストリー2019」の一環として、大正・昭和期に挙母地域で製作された多彩なやきもの「ころも焼」をご覧いただきます。

七州城のころ

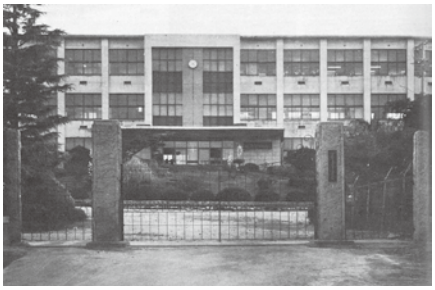
寛延２年（1749）に挙母藩主となった内藤家は、宝暦６年（1756）から現在の元城町付近で築城に着手しますが、度重なる矢作川の水害の影響で計画を断念。幻となったこの城は「桜城」と呼ばれました（内藤家以前に陣屋を築いていた三宅氏が、陣屋の内外に多数の桜を植えていたことによります）。のちに樹木台（童子山）への移城が目指され、天明５年（1785）に完成しました。この城が「七州城」（三河国を始め7か国の山々を望めたことによります）で、城郭の範囲の一部が豊田東高校跡地や豊田市美術館の敷地に相当します。城内には、藩士の子弟を教育する機関として藩校「崇化館（そうかかん）」が設けられました。この地は、江戸時代から学びの場所であったのです。

会　　期：７月６日（土）～９月16日（月・祝）
開館時間：午前９時～午後５時
休 館 日：月曜（祝日は開館）　**観 覧 料：**無料

挙母高等女学校から豊田東高校へ

明治期の学制下には、明治20年（1887）に開校した西加茂郡高等小学校が、明治41年に挙母尋常高等小学校となって童子山に移転し「山の学校」と呼ばれるようになります。その後、小学校は昭和34年（1959）に豊田市立童子山小学校となり、平成４年（1992）に御幸町に移転。跡地には豊田市美術館が開館しました。

他方、大正13年（1924）には挙母尋常高等小学校の２教室を仮校舎に、挙母町立挙母高等女学校が開校（昭和４年に県立に移管）しています。同校は、「温良貞淑・協和勤労」の校訓の下、地域の女子教育に大きく寄与しました。


挙母高等女学校から
豊田東高校に引き継がれた正門

戦後、新しい高校制度となり、挙母高等女学校はたびたびの統合等を経て、昭和34年に女子校の豊田東高校となりました。平成19年に男女共学校となって御立町に移転しています。

豊田東高校生徒との共働事業

展示制作に携わる豊田東高校の生徒

江戸時代から学びの舞台であったこの地に今後建設されるのが、新しい博物館です。「豊田市の歴史・文化・自然を継承し未来へ伝えていく場所・施設を、みんなでつくり続けていく」。こうした思いのもと、これまで各種イベント等で博物館に関するたくさんのアイデアをいただいています。

今回の企画展には、豊田東高校の生徒も展示制作に参加しています。博物館のアイデアや、同校卒業生からの思い出の聞き取り等、高校生の豊かな発想と新しい切り口を見せてくれるものと期待しています（多感な高校生であった20年以上前にこんな機会があったらなと、密かにうらやましく感じています）。

（倉林重幸）

豊田市教育自主研究グループ（社会科）と豊田市郷土資料館の連携展示

企画展「縄文人はグルメだった!?」を終えて

豊田市郷土資料館では平成 20 年度より、子ども達にとって自身の暮らす地域がより身近になるように、学校教育と連携した「郷土学習スクールサポート」を進めてきました（平成 30 年度実績：延べ 237 校・15,172 人）。現在豊田市が進める博物館整備においても、学校教育をはじめとした子ども達の利用は、大きな役割を担っています。

そのような中、今回の展示は、博物館が収蔵する歴史資料と歴史展示に、どのような要素や演出が加われば、子ども達の興味や関心、つまり「ワクワク感」を効果的に高めることができるかを検証し、その成果を博物館の常設展示へと反映するための試行的な実践となりました。展示の企画・製作にあたっては、教育自主研究グループ（社会科）に所属する市内小中学校の先生方に監修をいただき、当館学芸員と連携して進めました。

1．縄文時代の空間づくり

縄文時代の食生活のイメージ作りのために、展示室の中に縄文時代の森、竪穴住居を再現しました。また、入口では中学校の先生が描いてくださった縄文人が、今回のテーマを説明して導いてくれます（写真上・中）。

実際に「食べられる」博物館

「縄文クッキー？教科書では見たことはあるけど…食べられるの？作れるの？」中学生のとき、疑問に思っていたことでした。まさか、自分が縄文クッキーを産業文化センターの舞台上で作ったり、郷土資料館の展示のコーナーとして考えたりするなんて、夢にも思っていませんでした。今回、クッキーを作られたのはパティシエさんですから、安心して召し上がってくださいね。

今回は「食べる」という体験をメインに考えましたが、もし博物館ができるのであれば、週１回、いや、１か月に１回くらい「縄文クッキーづくり体験デー」とか「平安貴族？！　定食販売デー」とか、歴史に関わる食事を作ったり、食べられたりする場所があるといいなぁ、なんて考えていました。今回は難しかったですが…新博物館ではどうか？！楽しみですね。

あとは、僕のように小中学生の頃、ふと思ったことを実践できる場所があると…あ、それが「（仮称）えんにち空間」という場所なのかな。

とにかく、新博物館、楽しみです。

教育自主研究グループ（社会科）
代表
朝日丘中学校　　坂本　貴亮

2．３つの体験活動

スクールサポートで来館した児童生徒向けに、３つの体験を用意しました。①縄文カレンダーづくり体験（写真下）　②縄文クッキー体験　③「割っちゃえ！黒曜石」体験　の３つです。展示を見た後、縄文クッキーを食べて自分の舌で、黒曜石を割りながら自分の手で、縄文時代を体験できるようにしました。また縄文カレンダーづくりでは、展示内容と各自の生活経験を生かして、縄文人のくらしを探っていきます。これらの体験や操作活動を通して、より主体的・対話的で深い学びの実現を試みました。期間中は、6 校延べ 371 人の児童・生徒の皆さんに来館いただきました。

（伊藤俊満）

縄文カレンダー

「よみがえる織田信長像」後記

メディアでも度々取り上げられ、あまりにも有名なこの信長像は、信長の一周忌に当たる天正11年(1583)に豊田市の長興寺へ奉納されたものです。描かれてから400年以上、戦時中に行われた先の修復からも70年以上が経過し、全体に傷みが見られたため、平成28年度に修復を行いました。6月1日から16日にかけて豊田市美術館で開催した修復記念特別公開「よみがえる織田信長像」では、12,633人という多くの方にご覧いただきました。

ここでは、展覧会に合わせて調査した信長像400年のあゆみの一部をご紹介します。

重要文化財
紙本著色織田信長像
長興寺蔵

天明６年(1786)の長興寺宝物の一覧に「天正十一年信長公御影」と記されています。明治23年(1890)には、国の歴史編纂事業にも携わった文学博士・重野安繹(しげのやすつぐ)(1827～1910)が長興寺で信長像を閲覧し、「天下三幅対の逸物なり」と鑑定したといいます。また、大正13年(1924)発行の「三河鉄道名勝図絵」には、三河地域の名所とともに信長像が掲載されており、当時すでに著名であったことがわかります。

昭和13年(1938)には、上野の東京府美術館(現在の東京都美術館)で開催された戦争美術展覧会に信長像が出品されました。この展覧会は、東京朝日新聞創刊50周年記念事業として文部省(当時)の後援で開催され、武将像や武具など約200点、国宝も30点ほど出品されました。5月22日の東京朝日新聞に、「信長の肖像画に感慨の一紳士」という記事が掲載されています。この紳士は信長像を長興寺に奉納した余語正勝の子孫。老父から郷里の長興寺に祖先の奉納像があると聞いていたが、なかなか見る機会がなかったところ、今回の出品を知って駆けつけたといいます。彼はまもなく出征することが決まっていました。「此肖像の写真を一死報国の決意で出征する遺品に老親に贈り、長く家宝として最後の孝行にしたい」と語ったそうです。

信長の肖像畫に感慨の一紳士

土曜日に賑はふ戦争美術展

東京朝日新聞　昭和 13 年 5 月 22 日(日)

先の修復は、太平洋戦争末期に、大阪市立美術館内の工房で行われました。手がけた表具師・前橋新蔵氏は当時40歳。恩賜京都博物館(現在の京都国立博物館)内の文化財修理室で修業した後、大阪市立美術館の修理所に移りました。今回の修理で新蔵氏が軸木に記した墨書が発見されました。「昭和二十年四月沖縄戦苛烈最中修覆畢　表具師　阪急塚口在住　前橋新蔵　應召ノ赤紙ヲ受取テ」。もしかすると、これが最後の仕事になると思い、記したのではないでしょうか。

表具師の墨書が記された軸木　長興寺蔵

戦後はほとんど公開されず、“門外不出”と言われた信長像。昭和41年(1966)にフランスのルーブル美術館で開催された「日本武将展」への出品が戦後初の公開でした。また平成４年(1992)には、スペインのセビリアで開催された万国博覧会の日本館に展示されました。多くの外国人宣教師と交流し、舶来品を好んだという信長。400年以上の時を経て、海を渡りました。

戦後、国内における初公開は、平成４年６月２日から14日の間、豊田市郷土資料館で開催した「長興寺所蔵文化財修復記念特別展」。信長の命日にあたる初日のみ信長像が展示されました。全国から来場者があり、郷土資料館を順番待ちの列が取り囲みました。

信長像を見るための長蛇の列
平成４年６月２日

ひとつの文化財に関わってきた人たちや、エピソードを紹介した今回の展覧会。信長像の新たな一面をご覧いただけたのはないでしょうか。

(山田佳美)

平成30年度　文化財保護事業報告

1　文化財保護審議会　５回

・豊田市指定文化財（イヌツゲ）の指定解除についての諮問・答申
・（仮称）豊田市博物館基本計画の諮問・答申　など
・文化財防火デー：
　隣松寺・曽根遺跡公園・道慈山観音寺・香積寺

2　伝統的建造物群保存地区保存審議会　２回

3　埋蔵文化財保護の概要

○有無の照会・届出
・埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の有無照会　706 件
　（平成 28 年度 1,321 件、平成 29 年度 865 件）
・遺跡内での開発の届出・通知　合計 132 件
　（民間 109 件・公共 23 件）
　（平成 28 年度 154 件、平成 29 度 140 件）

○調　査
・範囲確認調査・試掘調査など　17 件
・本調査　３件（表１）。

表１　本調査を実施した遺跡一覧

遺跡名（所在地）	調査原因	調査面積（㎡）	主な遺構
神明遺跡（鴛鴨町）	個人住宅	120	竪穴建物跡
寺部遺跡 17D-I・18A-G 区（上野町・寺部町）	区画整理	6,921	土坑・溝・竪穴建物跡
寺部遺跡 18H-M 区（上野町・寺部町）	区画整理	4,286	土坑・溝・竪穴建物跡

○発掘調査報告書刊行
　第 78 集『大悲殿経塚』
　第 79 集『今朝平遺跡』
　第 80 集『花本遺跡 17A・B 区』
　第 81 集『寺部遺跡Ⅸ』
　『平成 29 年度市内遺跡発掘調査事業概要報告書』

調査風景

4　文化財等保存維持・修理補助事業

・有形文化財保存修理１件（守綱寺障壁画（襖））
・有形民俗文化財保存修理７件
　（足助新町山車大輪修理ほか）
・史跡名勝天然記念物保存整備１件（時瀬のイチョウ）
・有形民俗文化財保存維持 15 団体
・無形民俗文化財保存維持 27 団体
・伝統的郷土芸能保存維持 18 団体
・伝統的郷土芸能保存修理３団体
・郷土の先人顕彰活動４団体

5　史跡・名勝・建造物等整備・修理

・豊田大塚古墳手すり修理
・猿投山の球状花崗岩（菊石）保護フェンス修理
・三味線塚古墳看板修理
・倒木伐採（丸根城址・伊保西古城・根川古墳・
　平井大塚古墳・馬場瀬古墳群・豊田大塚古墳）

6　民俗芸能普及推進

・民俗芸能記録
　「豊田市の猩々」・「綾渡の夜念仏と盆踊り（盆踊り部分のみ）」
・豊田市こども棒の手演技大会　11 月 18 日開催

こども棒の手演技大会の様子

7　計画等策定

・旧龍性院庭園保存活用計画策定
　策定委員会・部会の開催（全５回）
・（仮称）豊田市博物館基本計画策定

8　その他

・ニホンカモシカ滅失対応　31 件
・（仮称）豊田市博物館に関わる市民周知イベント出展等（延べ 15 日　4,104 人）、自主イベント「第２回　今考える　みんなでつくる博物館」（266 人）

平成30年度　郷土資料館事業報告

1　展示・入館者数

平成 30 年度入館者数 13,972 人

・特別公開「猿投神社所蔵　木造千手観音像」
（4/10 ～ 4/23）2,707 人

・企画展「みんなであつめた災害の記憶」
（7/14 ～ 9/24）2,447 人

・企画展「物語と民具」　（12/15 ～ 3/3）3,540 人

・特別展「すすめ！タイム川ベラ―」
（1/19 ～ 3/24）3,066 人

特別展の様子

2　資料調査

・旧鈴木家住宅古文書調査／市内各地民具調査

3　資料収集・複製・修復

・伝英一蝶「四季風俗図屏風」　修復

・守綱寺障壁画（襖）複製

4　資料貸出

・他館等への資料貸出し（写真含む）　173 件

5　講座ほか

・体験講座 9 回
（まが玉づくり、お手玉講座　計 258 人）

・子ども向け体験企画　長期休暇期間にあわせ 3 回
春 839 人／夏 1,925 人／冬 924 人

・よろいを着てみよう　1 回／ 434 人

・史跡めぐり　1 回／ 22 人

6　とよた歴史マイスター活動

認定者 83 人　活動参加者数　延べ 642 人

マイスター活動の様子

7　郷土学習スクールサポート

・延べ 237 校／ 15,172 人の小中学生、特別支援学校が利用

・とよた歴史マイスターの活動 76 件／参加延べ 195 人、対応児童生徒 4,429 人

スクールサポートの様子

8　近代の産業とくらし発見館

平成 30 年度入館者数　9,166 人

・ミニ企画展「まゆまつり 2018 ～養蚕農家の営み～」
（4/24 ～ 7/1）2,329 人

・明治 150 年記念企画展「わたしたちの学校の昔」
（7/24 ～ 9/30）1,702 人

・企画展「とよたの印刷屋さん」
（12/4 ～ 2/24）2,455 人

・ものづくり講座：「ガラ紡糸のコースターづくり」等

・見学会：「養蚕農家を訪ねて」等 2 回

・ぶらコロモ：年 4 回開催（名木めぐり編、路地めぐり編、グルめぐり編、運気アップ編）

・その他：ふれ愛フェスタ 2018 にブース出展等

先人の想いが眠る

枝下用水 旧取水口跡

豊田市南西部から知立市北端部 1,552ha の農地は、矢作川右岸から取り込んだ枝下用水の水が潤しています。その取水口は現在越戸ダムにありますが、ダムができる昭和４年（1929）より前はその上流４km、現在の枝下町にありました。枝下用水を語る上でこの原点は外せません。この遺構の多くはダム湖により水没し、人目に付かず、訪れる人も語り継ぐ人も少なくなりました。

枝下用水の偉業を完遂させた中心人物は、小中学校の副教材で紹介されている西澤真蔵氏です。真蔵氏は弘化元年（1844）近江国に生まれ、麻布や三河木綿を全国に売り歩く近江商人として活躍しました。枝下用水の事業に着手する前は、大阪や長崎に支店を設け、米国にも輸出販売するなど、富と名誉を手に入れた人物でした。

枝下用水の計画は明治９年（1876）からありましたが、資金面や度重なる自然災害により、着手しても途中で頓挫し、完成に至りませんでした。用水を必要としていた農民の暮らしは、年貢により苦しいものでした。米の不作や自然災害で収穫できずとも、容赦ありません。真蔵氏が生まれる僅か８年前（天保７年）、全国的に有名な加茂一揆がこの挙母藩内で起きていました。一揆で一時的に庄屋やお上を制圧しても、やがて武力の差から鎮められ、首謀者は厳しく罰せられました。明治に入り、年貢米が金銭の納税に変わっても苦しさは変わらず、払えなければ農地を売り小作人となり、地主と貧富の差は広がるばかりでした。それが続けば、一家離散になります。たとえささやかな暮らしでも家族の笑顔を見て暮らす事が農民の願いでした。米が安定して収穫できれば、問題は解決します。稲を枯らさないためには、大量の水が必要でした。農民は口々に「水が、水が欲しい」と願っていました。

真蔵氏が三河木綿の仕入れで、この地方を訪れた時この農民の声や、家族が引き離される様子が忘れられずにいました。そして当時の愛知県知事に、枝下用水の事業主となることを要請されましたが、最初は困難が予想され躊躇しました。真蔵氏を動かしたもの、それは近江商人の志でした。商売で得た利益で世間も良くする事、今で言う社会貢献活動です。計画を固め事業として取り組みました。しかし、工事は困難を極め、特に第１水門と第２樋門は地形上、峡谷と巨岩が工事の行く手を阻みました。明治 20 年には、自動車や重機は一切ありません。全て手作業、人力による巨岩の破砕運搬という気の遠くなる工事です。作業者は、用水受給者となるたくさんの農民が集まりました。本業の農業をしながらの工事の為、相当な負担です。この用水が完成すれば、米が安定的に収穫でき、家族を養え子孫に受け渡せるという強い想いでこの工事にのぞんだ事でしょう。

第１水門【写真 1】は矢作川の本流から水を取り込む最初の構造物です。枝下町公民館そばの矢作川右岸から見ると水面にうっすらと姿が見えます。ここから下流へ 700 m下ると、硬い石で積み組まれた第２樋門【写真 2】があり、水量調整を果たす重要な役割を果たしていました。この先には巨岩を割り掘られた水路【写真 3】が下流に向かっています。当時水路の多くは、底や側面も土の為、水を送っても地面に浸み込んでしまい、取水口から大量の水が送られました。末端の乾いた田に水が届き、稲に水を潤した瞬間の農民の喜びは測り知れません。しかし、事業主として資金を注ぎ込んだ真蔵氏は、明治 27 年の用水原型完成までに全財産を費やし借金まで作ってしまい、明治 30 年生涯を閉じました。

真蔵氏は自分の財産を失っても、農民が年貢に困らず家族が引き離されず、幸せに暮らせる事に誇りと満足感で一杯だったでしょう。農民は感謝を忘れず、子孫に真蔵氏の功績を伝え、感謝の行事が今でも各地で行われています。第１水門の全容と第２樋門下部の姿は、今後幾多の歳月が流れても肉眼で見える事はないでしょう。しかし、それは真蔵氏の想いである、農地に豊富な水を与え続ける事を意味しています。

（とよた歴史マイスター　田内 三男）

【写真１】旧取水口 第１水門

役目を終え水中で静かに眠る。

【写真２】第二樋門

先人が幾多の改良を重ね、強固で形は今も崩れていない。

【写真３】第二樋門からの水路

巨岩を割り掘られた水路

祭り歳時記　～とよたの猩々（しょうじょう）～

みなさんは、“猩々”を知っていますか？

猩々は、顔は人間に似て、体は赤く、お酒好きであるという中国の想像上の生き物です。伝統芸能である能楽の演目にも主人公として登場する、日本でも昔から親しまれてきた生き物であるといえます。

実はこの猩々、豊田市内南部に位置する高岡町の神明宮と、中根町の神明宮のお祭りに登場します。

どのように登場するかというと…

猩々の人形は、竹を編んで作られ、顔は和紙を張って、色を塗っています。その猩々の人形の中に人が入ってかぶる形で着用します。

一緒にお祓いを受けに行きます（高岡町）

猩々の人形をかぶると、体長２mほどになります。そして、手には大きな赤い猩々の手を持って、子どもたちを追いかけるのです。

子どもたちは、楽しげに猩々から逃げ回ったり、ちょっかいをかけたり…。中には、大きな猩々を怖がり、泣いてしまう子も。

子どもたちの頭をなでます（高岡町）

ですが、猩々に触られると無病息災で過ごすことができるといわれているため、泣いている子の頭も猩々はそっとなでていきます。それぞれの猩々は、目と舌が動くように作られていたり、顔の表情の作り方など、見比べてみると相違点を見つけることができます。

猩々（高岡町）

猩々（中根町）

豊田市の祭礼に登場する猩々は、名古屋市南部の鳴海を中心に一つの文化圏が見られる祭礼の造り物と同種のもののため、そこからの影響を受けてこの地方に取り入れられたものだと考えられています。豊田市南部にまで名古屋市の祭礼の内容が伝わり、現在まで続けられていることは、大変興味深いことです。

お祭りの様子（中根町）

とよたの猩々は、高岡町では４月の祭礼に、中根町では 10 月の祭礼に毎年登場しています。

（名和奈美）

引用・参考文献：
『新修豊田市史 17　別編　民俗Ⅲ　民俗の諸相』

■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間　午前９時～午後５時
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状線「新豊田駅」より　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩５分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.104
令和元年７月 10 日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471- 0079 豊田市陣中町 1-21-2
TEL. 0565-32-6561　FAX. 0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com
FB●http://facebook.com/toyotarekihaku

※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。